

どき 土器づくり ... 2. のや 野焼きする

かけ干しする

できた土器は、風の当たらない日かげで、ゆっくりと乾かします。2週間くらいは干します。急に乾かす

と、ひび割れのもとです。

のや 野焼き

まず、地面を乾かすためにたき火をします。この時、まわりに土器を置いて、ゆっくりあぶります。時々土器を回し、まんべんなくあたためましょう（1時間くらい）。

土器の色が変わり、地面の水分がぬけたら空だきは完了です。

マキがオキ火（炭火のような状態）になったら平らにならし、その上に土器を置きます。

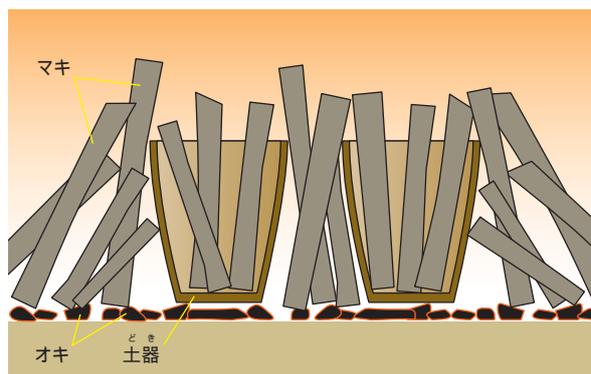
土器と土器の間や土器の中にもマキを差しこみ、さらに土器がかくれるくらいマキを周りに積み上げます。オキの熱で、マキには自然に火がつきます。

周りのマキが焼け落ちるころには、だいたい焼けています。長い棒を土器の間に差しこんで、そっと土器

をたおし、火を寄せて底を焼きます。

その後、自然に冷めるのを待ち、取り出します。土器がまだ熱い時にさわって、やけどしないように。

火を完全に消して、安全を確認したら完了です。



どきのや 土器の野焼きイメージ。マキで土器をおおってしまう。

火起こし ... 木と木をこすりあわせて

かつては、くぼみをつけた板の上で、木の棒をキリのように回転させて火を起きました。板はスギなどのやわらかい木、棒はヤマガワなどの固い木がいいようです。

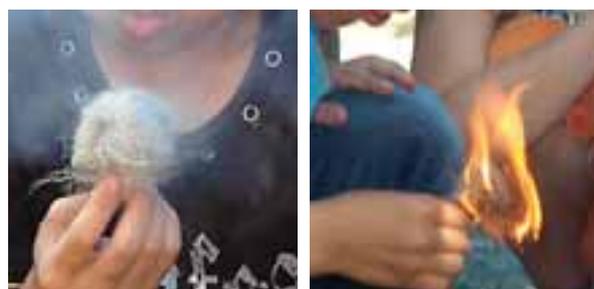
ただ、初めての人にはむずかしいので、写真のようなもう少し便利な火起こし道具（江戸時代からのものらしい）を使うといいでしょう。ひものねじりを使って回転させ、おもりはずみ車にしたものです。

木と木をこすりあわせることで「まさつ熱」をつくり出し、炭の粉をためます。そこへさらにまさつ熱を送りこむうちに、けむりが上がり、2mmくらいの炭火がとまります。

これを燃えやすいもの（ゼンマイの綿やタンポポの綿毛など。写真では麻ひもをほぐして鳥の巣のようにしたもの）に置いて包み、息をふきかけます。

もうもうとしたけむりが上がり、突然「ポツ」と火がつけます。あわてず落として、火ばさみで運びましょう。

最後に、つけた火は必ず完全に消すように。



得意、不得意はあるが、協力すれば子どもたちでも火が起きる。
(帯広市ジュニアリーダー養成講座あすかの会リーダーキャンプ)